夕焼け通信1299号　2021.3.15

〒690-0823　島根県松江市西川津町4276-B402
miyaken@me.com　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/
編集 宮森健次

専業ババ奮闘記（その２）45

木幡智恵美

里帰り（6）

今のところ、宗矢はそう大泣きはしない。寛大が産まれた時、初めてそういう手段があることを知った。マーケット袋をもみもみするのだ。その音が、母胎内にいる時の音に似ているのだとか。寛大が泣いて、いくらあやしてもどうにもならない時、抱っこしながら袋をもみもみすると、不思議と泣き止んだ。だから、部屋にはマーケット袋を常に置いていた。実歩の時も、袋は欠かせなかった。けれども、宗矢はまだ使ったことがない。母親の年を考え、ついでに祖母の年齢も考慮し、あまり負担を掛けないようにしてくれているのだろうか。

暦の上では春になって間もない日の明け方、ドンと音がするので、不審者でも侵入したのかと階段を下りる。娘も宗矢も眠っていて、ことりとも音がしない。玄関の方を見ると、外がほの明るい。積もった雪が、屋根から落ちる音だったようだ。安心して布団に潜り込んだが、なかなか寝付けず、再度階段を下り、焼酎を一口あおって横になる。少し眠ったようだ。

翌朝、寛大と実歩は雪が積もっているのを見て大喜び。我が子が小さかった頃使っていた手袋を出してやった。前夜は、保育所でエプロンが要るというので、息子が小学校の時に作ったのを出している。パズルやブロック、ウルトラマンや怪獣のフィギュアなど、今、寛大や実歩が使っている遊び道具は、皆我が子が使っていたものだ。捨てずに取っておくものだ。

義母の身の回りの世話をしてデイサービスに送り出し、その日は一日中家の中。宗矢の風呂は、ストーブをガンガン燃やした中で行った。雪はしんしん降り積もる。寛大、実歩の迎え以外、外へは出ずじまいで夜になる。夕食を終え、寛大と実歩が風呂から上がり、娘が風呂に入る間、宗矢を預かり、最後に私が湯船に浸かっていると、ドンドンドン。また雪ずりかと思ったが、連続音が絶えない。義母だ。慌てて風呂から上がり、部屋に行くと、電気毛布に湯たんぽまで入れて寝かせたのに、まだ寒くて眠れないと言う。エアコンをつけて部屋を暖め、「これで大丈夫ですよ」と声を掛ける。

その夜中、あまりの冷え込みのせいか、寛大も実歩も布団から脱出しなかった。

がらがら橋日記

宮森健次

最後の給料

給与の明細票は、支給日の前日か数日前に配られる。ぼくが教員になったころは、現金支給だったので、明細票は給料袋に糊付けしてあった。それに対する識字能力など無いに等しく、また中身に対してもそんなものかと思うくらいで、菓子箱にそのまま入れて、管理などとはほど遠いぞんざいな扱いをした。

六畳一間の住宅費などたかが知れていた。食費にしてもどうかすると給食の残りをもらって帰って済ましていたので、いったい何にいくらかかっているのかなどまったくもって関心がなかった。

菓子箱はしばらくするといっぱいになるので、定期的に処分したが、念のために袋の中身を調べると、一万円札が出てきたりして、捨てる前に確かめておいてよかった、と儲かった気分になったりした。

結婚してからは、お金のことはすべて妻に任せっきりで、ぼくはやっぱり無関心のままだった。給料が銀行振り込みになったらますます拍車がかかり、金とは必要なときに妻から受け取り財布に入れるそれがすべてで、あとは霞の中だった。

ただ、子どもの頃から、公務員の給料など最低限の保障しかされていないと母にしつこく聞かされ、贅沢を許すような余裕は一切ないのだと刷り込まれていたおかげで、散財とか浪費の類いには近寄らなかった。その分、おもしろいことから遠ざかったかも知れないのだが、それはそれで仕方がない。

「最後の給料ですね。」

事務員さんが明細票の入ったクリアファイルをぼくに手渡すとき、そう言って微笑んだ。いつも通りではない渡し方に気遣いが感じられた。ここは素直に「どうもありがとう。お世話になりました」と言えばいいところだったが、「最後だからサービスが…ないか、やっぱり。」などとつまらぬ冗談で返してしまった。

五十を過ぎたあたり、善意を装ったセールストークに乗せられそうになったことをきっかけに、妻が「どうしたこと？」と不思議がるほど、お金のことを調べ上げるようになった。内外の経済にも関心が向いて、それまで別世界だった新聞のページや本屋の書棚もよく見るようになった。それまで無関心で来られたのはあきれるほど幸福だったのだということ、それは決して褒められたものじゃないってことも思うようになった。同窓会で中学校の恩師が少し悔いるような調子で「金の話など汚らわしいと思っていた」と語っていた。教員という仕事、どこか道学先生気分を背負い込んでしまうものらしい。遅きに失した気はするが最後の給料明細を手にするまでにそれに気づけただけでもよかったということにしよう。

30代フリーター　やあ、ジイさん。「首相が急転換」の見出しで朝日新聞が首都圏の緊急事態宣言の再延長を報じていた。解除に前向きだったのに、知事や医師会、専門家などの慎重意見を前に方針を変えた、と（3月4日朝刊）。

年金生活者　政権の方針をふらつかせている最大の要因は、新型コロウイルスに今なお「未知」の部分が多いことにある。

「未知」の事態に対処するには、それまで「未知」だった新たな方法をつくり出す必要がある。「既知」の方法が無効である以上、それは今ある現実の中に求めることはできない。だからといって、無からそれを生み出すこともできない。

だとしたら、現実には存在しないが、その外に存在する何かをもとに編み出すほかない。その「何か」こそが「理念」と呼ばれているものだ。「理念」は現実の存在ではないが、無ではない。

発足当初から「理念」がないと批判されてきた菅政権は「未知」のウイルスに対処するのには適していない政権ということができる。ただし、「理念」ならなんでもいいというわけではない。安倍政権には「理念」があったが、コロナに追い詰められて倒れた。安倍晋三の「理念」は彼が「美しい国」と名づけた大日本帝国の現在バージョンであり、「未知」には無効の「既知」の理念でしかなかった。

30代　どんな理念が「未知」に有効なんだ

年金　典型例としてあるのは日本国憲法9条の非戦・非武装の理念だ。敗戦という、近代の日本人にとって「未知」の事態を前にして、この「理念」は報復とか再戦といった「既知」の方法ではなく、戦いの放棄と武装解除という「未知」の方法を日本国政府と日本国民に指し示した。

それは敗北の屈辱を非戦の栄光に転化することによって、一敗地に塗れた日本国民に生きるよすが与え、歴代首相らがことあるごとに自慢してきた「わが国の平和と繁栄」を築く原動力となった。さらにそれだけにとどまらず、今世紀に入って核兵器禁止条約という憲法9条の核兵器版を生むに至った。

30代　それに匹敵するような「理念」を人類は新型コロナに対してもつくり出すことができるだろうか。

年金　いま考えられるのは9条の「理念」を新型感染症への対処に応用することだ。非戦とは国家を開くことでもある。世界の諸国家が自らを開いて情報やヒトやモノやカネを融通しあうことがパンデミックへの対処には必須であることを世界はコロナ禍で思い知らされた。

30代　読売新聞の世論調査（3月5～7日実施）では、首都圏の緊急事態宣言を2週間延長したことを「評価する」が78％にのぼっている。

年金　延長が決まる前の日本経済新聞の世論調査（2月26～28日実施）で「再延長」を求める回答が8割を超えたとき、同社の編集委員・論説委員の矢野寿彦は「宣言下の現状を『心地よい』と思っている人が意外と多いのかもしれません」とコメントし、そう考える理由を「海外のロックダウンと違い昼間は自由に行動できて普段通りの生活が送れる、旅行や夜の会食を我慢すれば済む、株価は絶好調で経済への不安も減った、といったところでしょう」と説明している。そして「宣言のしわ寄せが一部の人にだけいっている証ともいえます」と付け加えている。

30代　しわ寄せが行っているおもな先は飲食業界と旅行業界だ。廃業や失業など深刻な打撃を受けている。

年金　それは国民全体から見れば一部であり、多くの国民はそれらの利用を我慢させられる程度の影響しか受けていない。業界の受けているダメージを気の毒には思っていても、やっぱり不安だから宣言延長を支持する方に傾いてしまう。

ただし、国民の多くは感染の危険がわが身やわが家やわが職場に差し迫っているとは感じていないはずだ。毎シーズンのインフルエンザの患者数にくらべるとコロナの感染者はずっと少ない。自分や周りの人たちの感染を経験している国民は、全体からみれば少数のはずだ。緊急事態宣言への支持も何がなんでもといった切実なものではなく、よくわかっていないウイルスだから万が一に備えて、といった程度の強さと推察される。

これにもうひとつ推察を加えるなら、リモートワークで通勤ラッシュ地獄を免れたり、職場で上司や同僚と接するストレスから解放されたり、ソーシャルディスタンスの呼びかけで買い物の最中に他人の身体と接触する不快さがなくなったり、行きたくない会食の誘いをことわりやすくなったり、新幹線が空いていて乗りやすかったり、道路の渋滞が減ってイライラしなくなったり……と、わりと快適に感じることも増えていることも、宣言を支持するひそかな理由になっていると考えられる。

30代　「自粛」が解かれることは当分なさそうだ。

年金　いま言ったような国民の隠れた本音が世論調査結果を左右し、政府のコロナ対策や経済の変化の方向を決めていくと予想される。緊急事態宣言は解除されても、国民や事業者の「自粛」を求める政策は今後も続くだろう。そして経済では「自粛」に対応した業態や業種の転換、制約を逆手に取ったイノベーションなどが相次ぐだろう。

ニュース日記　777

中村　礼治

緊急事態宣言の「心地よさ」